

退官にあたって

稲本直樹（化学教室）

光陰矢の如しと言いますが、月日の経つのは早いもので、昭和23年に理学部化学科に入学してから、はや40年余が経過しました。昭和37年から38年にかけてカナダ・トロント大学に留学した1年2ヶ月を除いて、今迄の人生の2/3は理学部にお世話になったこととなります。

先ず第一に思い出されますことは、紛争の最中

の昭和44年6月に、今の理学部7号館の場所にあった私の研究室の一室より夕方出火し、一部屋焼失したことです。私は学会の用務で名古屋に出張中でしたが、虫の知らせか、会の途中で帰ってきてこのことをききびっくりしました。当日は東大内で何か起こりそうとかの情報で、テレビカメラが近くに待機していて、煙をみてかけつけ、中継

したそうで、化学教室はじめ理学部の皆様方に大変御迷惑をおかけし、またお世話になりました。

翌年1月には機動隊導入で安田講堂攻防戦になりましたが、その折、加藤一郎総長が様子を見たいとのことで、当時の久保亮五理学部長、赤松秀雄教授が安田講堂に最も近い化学最新館（現在の化学本館）屋上に案内することになり、私も警備役として約一時間御一緒致しましたが、加藤総長から「学生もなかなか頑張っていて機動隊も苦戦だね」という言葉を聞いたのも20年前となりました。

昭和58年、学生委員会委員長として五月祭常任委員会との協議では苦勞し、やめてから胃潰瘍をやりました。五月祭の時の農学部グラウンドでのロックコンサートの大きな音量と終了が20時頃になるなどが問題となっており、周辺の方々から苦情が殺到すると聞いていました。この問題が協議の項目となることは確実で、私には手に追えそうになかったので、学生部と相談し、法学部からのY教授と同席で会ってはそのことで、そうしたところ、さすがは法学部の先生で、法律論、判例などをひいて説得したのはさすがと思いました。その時の学生側の正副委員長はかなり協力的であったことも幸し、音量には問題がありましたが、終了時間は約束の18時（周辺町内会長からの直前の申し入れ時間でもあった）をほぼ厳守してもらえ、抗議の電話は今年はなかったと平野総長よりねぎらいの御言葉を賜りました。しかし、翌年はまた終了がかなりおくれたと聞いています。

また、あるサークル企画であるタレントのコンサートが予定されていましたが、五月祭間近になり、本富士署もつかんでいないある右翼(?)団体から、東大にふさわしくない人だからコンサートを中止せよ、さもなければ実力で阻止するとそのサークルに電話が頻繁にあり困っているとの申し出があり、その対応にも苦慮しました。既にかなり前売券が出ているのでサークルとしては中止できないとのことで、前日夕方委員会で検討し、ともかく中止とし、その対策を伝える掲示を出すこ

ととし、その文案をY教授と夜半に電話で協議し、学生部に指示しました。当日、それとなく会場周辺に何人かを交代で配して注意していましたが、幸にも何事もなくすみ、ほっとしました。

停年の前3年間は環境安全センター長に任命され、石綿問題が工学部、地震研からわいてきて、石綿問題担当の有馬朗人総長特別補佐らとその対応を頻繁に協議しましたが、有馬先生なので相談がしやすく、助かりました。色々面倒な問題が出てきて、一時はどうなることかと思いましたが、石綿の取扱いマニュアルもでき、除去工事もスムーズに行なわれており、ほっとしています。

研究の面では、よいスタッフ、学生に恵まれ、自由に好きなことをやらせていただきました。流行の研究はせず、定説を疑問の目をもって眺め、総合的に考える立場で仕事をしてきましたが、9年前、今迄は不安定で単離できないとされていた化合物群のいくつかを、かさ高い基を導入することにより単離に成功し、この方面の研究を世界的に活発化できたのは望外の喜びです。また、周期表でもわかるように、化学は周期性の立場から整理されています。しかし、総合的かつ定量的に考える際には不便もあり、周期性を消去して直線的に考える方法にめどをつけましたが、雑用に追われ、そのままになっています。これからは暇もできると思いますので、できるだけこの考えを発展させたいと願っています。

最後に、長い間お世話になった理学部の諸先生方、事務の方々には心から御礼申し上げますとともに、皆様の御活躍と理学部の御発展をお祈り致します。